平成24年度「海と船の博物館ネットワーク活動」事業完了報告書

事業内容

全国２３か所の博物館、資料館等が開催する海、船、川、湖沼に係る２３の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示を通して海洋及び海事知識の普及啓発を図った。また、海と船の巡回展展示アイテム３セットを全国１０か所の博物館、水族館等に貸し出し、海と船の巡回展を開催し、海と船の博物館ネットワークホームページにて、海と船の企画展情報及び海と船の巡回展情報を告知し、ホームページの保守・運営を行った。

１．「海と船の企画展」への支援（申請２４館、支援実施：２３館２３企画展）

※広島県立歴史博物館においては、対象企画展が県内１０市町村での巡回展示となったことから、１０館にわたる相互の事務手続き及び開催各館における支援要件の遵守が困難なため、支援を辞退した。

①名　　称：水の生き物　おもしろ企画展　全１０企画
主 催 者：八戸市水産科学館マリエント
開催時期：平成２４年４月２１日（土）～平成２５年３月１５日（金）
※３月１６日から３月３１日までは自主開催
場　　所：八戸市水産科学館マリエント
内　　容：年間を通し１０企画展を開催し、普段は目にすることのできない、生態や姿形が珍しい・面白い・かわいいといった水生生物や、水産分野での重要な役割を持つ生物等について、テーマを設け、資料（キャプション）だけでなく生体そのものを効果的に展示することにより、将来の水産や海洋分野を担う子供たちに、水産・海洋分野への興味・関心・夢を創出した。
また、八戸はイカの漁獲量日本一であり、“イカのまち八戸”として、昨年、行政が“八戸イカの日”を制定し、イカの付加価値向上・ブランド化等の地域活動が活発化していることを受け、当館においてもイカの飼育設備を強化し、イカ生体展示を充実させ、地域へのイカの更なる普及・定着を図った。

②名　　称：開館５周年記念特別展「清盛と日宋貿易」
主 催 者：特別展「清盛と日宋貿易」実行委員会（兵庫県立考古博物館）
開催時期：平成２４年４月２１日（土）～平成２４年６月２４日（日）
場　　所：兵庫県立考古博物館
内　　容：平清盛や平氏、日宋貿易に関連する考古資料として、日宋貿易でもたらされた陶磁器や皿など、東アジアとつながった瀬戸内各地や当時最大の貿易港であった博多出土の資料を中心に展示し、平氏の興亡、清盛による大輪田泊の整備によって日宋貿易がさらなる発展を遂げたことなどを紹介。清盛と兵庫県との関わりを、より深く理解してもらう機会とした。関連事業として６回の講演会を開催し、関

連行事として、「考古博であそぼう」、遺跡ウォーク、プチ蒔絵体験、クイズラリー等のイベントを開催した。

③名　　称：海からどんぶらこ―浜辺の漂着物―
主 催 者：徳島県立博物館
開催時期：平成２４年４月２７日（金）～平成２４年６月１０日（日）
場　　所：徳島県立博物館
内　　容：漂着物の展示を通して、徳島県民、特に子どもたちが楽しみながら海の環境や海流への理解を深めるとともに、海洋への関心を高めることを目的として開催。館所蔵の県内外の漂着物資料の他、県在住の漂着物研究家の資料を展示することで、県内の漂着物学及びビーチコーミングの現状を広く一般の県民にわかりやすく紹介し、関連行事として、ビーチコーミング体験、ビーチクラフト体験を開催した。

④名　　称：大学博物館共同企画シリーズⅡ
「閉ざされた島　開かれた海―鎖国のなかの日本」
主 催 者：西南学院大学博物館
開催時期：平成２４年６月２日（土）～平成２４年８月４日（土）
場　　所：西南学院大学博物館
内　　容：船とともに発展してきた日本が、鎖国体制下となった後、どのような国内状況に置かれたのか。国内の海路の発展、船の役割などどのように変化してきたのかを紹介する企画展として、“海”と“船”が江戸幕府の政策下において受けた影響と、これにともなう人々の想いも併せてとりあげた。関連行事として、特別展関連公開講演会、こどもワークショップなども開催した。本展は、大学博物館共同企画シリーズとして、神戸大学海事博物館との共同開催で、相互連携とネットワーク構築も目的としていた。

⑤名　　称：ペリーの顔・貌・カオ―「黒船」の使者の虚像と実像
主 催 者：神奈川県立歴史博物館
開催時期：平成２４年７月７日（土）～平成２４年８月２６日（日）
場　　所：神奈川県立歴史博物館
内　　容:「黒船」やアメリカ東インド艦隊の様子を描いた画像資料を展示し、当時の蒸気船や艦隊の動向などについて理解を深めてもらうとともに、日本史上著名な外国人の一人である。ペリーについて、今日まで遺る多種多様なペリーの肖像に焦点を当て、当時の人々がどのように認識していたのかを再確認する機会とした。

⑥名　　称:最恐！危険生物アドベンチャー～海と山のアブナイ生きものたち～
主 催 者：萩博物館
開催時期：平成２４年７月７日（土）～平成２４年９月９日（日）
場　　所：萩博物館
内　　容：来場者が世界の海や山を探検して萩を目指し、その過程でさまざまな危険生物からの攻撃をかわしたり共存できる術を体得できる体

験型の展示会を開催し、海や山の自然の驚異を体感しつつ、正しい知識やテクニックを持つことで十分に自然界に分け入り、共存できることを実感し、自然科学への挑戦心・探求心を養う機会とした。関連行事として「危険でおいしい親子キッチン＆展示観覧」、「世界“アブナイ”怪魚激闘記（トークショー）」などを開催。

⑦名　　称：不思議いっぱい！貝たちの世界―蝸牛から烏賊・蛸まで―
主 催 者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館
開催時期：平成２４年７月７日（土）～平成２４年９月１７日（月）
場　　所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館
内　　容：陸や淡水域の他、海岸から深海まで様々な環境に適応した貝類の多様な生態にスポットを当てるとともに、人との関わりなどについても生態展示、シェル万華鏡、標本、映像、写真、模型類など用いて紹介し、自然からの恩恵を再認識する機会として開催した。関連行事として以下の１２企画を開催。①オープニングセレモニー、②自然講座「きみも今日からイカ・タコ博士？！」、③記念講座「貝の魅力・貝を楽しむ」、④「貝がらでカラー魚拓をつくろう」、⑤「貝がらで遊ぼう！」、⑥「貝のアクアリウムキャンドルをつくろう」、⑦自然講座「貝の動物園をつくろう」、⑧記念イベント「カタツムリは友だち」、⑨「貝でキラキラ万華鏡☆」、⑩「貝紫染めにチャレンジ！」、⑪「筑波山のカタツムリを観察しよう」、⑫「イカの拓本をつくろう」

⑧名　　称：船の推力発展史　―人力・風力から未来へ―
主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
開催時期：平成２４年７月１３日（金）～平成２４年１０月２７日（土）
場　　所：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
内　　容：1800 年初頭に蒸気駆動の外輪船が出現するまで船舶の動力は人力か風力であった。館内には江戸、明治期の和船、西洋型帆船、タービン・ボイラーの蒸気機関、焼玉機関、ディーゼル、超伝導、原子力機関に関連する船舶ならびに動力模型を多く所蔵しており、これらを展示して歴史的また技術史的に推力の変遷を分かりやすく解説した。関連行事として平成２４年度神戸大学海事科学研究科公開講座（第６回 海事博物館市民セミナー）を計５回開催した。

⑨名　　称：元寇物語～玄界灘に沈んだ蒙古襲来の記憶～
主 催 者：五島観光歴史資料館
開催時期：平成２４年７月２０日（金）～平成２４年８月３１日（金）
場　　所：五島観光歴史資料館
内　　容：約 750 年もの間、玄海の海に残され、現代において引き揚げられた海底遺物（船の道具、武具、生活用具など）を展示し、日本の鎌倉時代と中国（元）との歴史を鑑みることで鷹島周辺及び北部九州の海域の歴史・文化的価値を紹介した。関連行事として、企画展関連講座「蒙古襲来の史実―鷹島海底遺跡が語るもの―」を開催した。

⑩名　　称：特別展示「謎の生き物？カブトガニの不思議展」
主 催 者：笠岡市立カブトガニ博物館
開催時期：平成２４年7月２０日（金）～平成２４年9月３０日（日）
場　　所：笠岡市立カブトガニ博物館
内　　容：博物館で 20 年余りにわたって行ってきたカブトガニの様々な調査・研究の貴重なデータは、一部の研究者に知られているだけで、多くの人々には疑問を残したままとなっている。そこで、広くカブトガニを理解していただき、保護啓発につなげていくため、得られた調査・研究の蓄積をもとに、カブトガニの歴史、産卵のメカニズム、生態、体のメカニズムなどについて、図、写真、映像、雌雄の大型模型を用いて分かりやすく展示した。

⑪名　　称：港湾都市鹿児島と島津氏　―海を見ていた殿様たち―
主 催 者：尚古集成館
開催時期：平成２４年7月２１日（土）～平成２４年１０月１１日（木）
場　　所：尚古集成館
内　　容：徳川幕府が海外との交易に制限を加える以前、鹿児島は海外交易の拠点として栄えていた。また江戸時代も、琉球を経由して海外の情報・物資が鹿児島には流入し続けていた。本特別展では、当時の絵画・古地図・写真のほか、島津家伝来のガラス器、琉球漆器などの展示を通して、こうした海外との交流の様子や、「蘭癖」と称された島津家当主たちの動きを追い、鹿児島の歴史・文化の一端を紹介した。

⑫名　　称：口之津開港４５０年記念事業「世界帆船模型展覧会」
主 催 者：口之津歴史民俗資料館・海の資料館
開催時期：平成２４年9月１０日（月）～平成２４年9月２３日（日）
場　　所：口之津公民館
内　　容：開港 450 年を迎える口之津港で、市民が広く海や船を理解し、興味を持つこと、また、港に関わった先人や企業の歴史・文化に触れることで地域の港「口之津港」を広く地域の人々に知ってもらうことを目的として開催した。会場では、新規に製作したポルトガル船の模型のほか、ザ・ロープ九州からは 44 隻の帆船模型、口之津港を起点に発展した企業関係資料、口之津船員会によるボトルシップなどを展示した。関連行事として海関係のペーパークラフト教室、海洋研究開発機構（JAMSTEC）協力による「水圧実験」教室などを開催した。

⑬名　　称：荒川のめぐみ　田んぼのものがたり
主 催 者：埼玉県立川の博物館
開催時期：平成２４年9月２２日（土）～平成２４年１１月１４日（水）
場　　所：埼玉県立川の博物館
内　　容：「田んぼ」は主食として欠かせないコメをつくる場として、また、生きものがゆりかごに利用する豊かな自然環境として水のめぐみを享受している。埼玉県、そして荒川流域の田んぼをクローズアッ

プし、大事なコメの生産の場であり、また豊かな自然環境としての二面を掘り下げ、水のめぐみを考えるとともに、現代のコメづくりや生きものと共生する環境を考え、体験する展示を行った。

⑭名　　称：大黒屋光太夫記念館第８回特別展
　　北の黒船・ラクスマン来航―光太夫帰国２２０周年―
主 催 者：鈴鹿市（鈴鹿市大黒屋光太夫記念館）
開催時期：平成２４年９月２６日（水）～平成２４年１２月９日（日）
場　　所：大黒屋光太夫記念館
内　　容：鈴鹿出身の大黒屋光太夫の帰国、ラクスマン来航 220 周年を記念して開催した本展では、＜鎖国＞をしていた江戸時代の日本に最初に開国を求めてきた異国船来航である「ラクスマン来航事件」と大黒屋光太夫の帰国について、関連する絵画や古文書等のほか、新たに製作した来航時のエカテリーナ号ジオラマなどを用いて紹介し、日露間で初めての外交交渉が行われたことや、初めてのロシア船来航に対する人々の反応・影響などを紹介した。また、本展はラクスマン来航の地である北海道根室市でも巡回展示を行い、博物館同士の連携を図ることができた。

⑮名　　称：平成２４年度企画特別展「徳川家康と島津家」
主 催 者：黎明館企画特別展実行委員会（鹿児島県歴史資料センター黎明館）
開催時期：平成２４年９月２９日（土）～平成２４年１１月４日（日）
場　　所：鹿児島県歴史資料センター黎明館
内　　容：本展では、歴代の 15 代将軍をはじめ、鎧甲冑・刀剣・書画・所用品・文書など極めて貴重で豪華な史資料群を一堂に集め展示し、薩摩藩に許可された朱印船貿易、琉球口貿易を概観し、薩摩藩領が東アジア世界に近接する積極的外交貿易の絶好の土地柄であったこと、島津家創設の家康廟や東照宮の造立、日光東照宮への寄進など島津家による東照宮信仰を取り上げることで外様大名島津家と徳川将軍家との複雑な“因縁”を紹介した。

⑯名　　称：企画展「醤油を運んだ川の道―利根川・江戸川舟運盛衰―」
主 催 者：千葉県立関宿城博物館
開催時期：平成２４年１０月２日（火）～平成２４年１１月２５日（日）
場　　所：千葉県立関宿城博物館
内　　容：千葉県において醤油生産量が全国一位となる基礎が築かれたのは、利根川東遷以降、河川交通網の整備に伴い、大消費地・江戸と生産地が直結したことに始まる。利根川・江戸川流域の河岸には多くの物資が集まり、また舟運を活用した地場生産も起こってきた。
特に、江戸に近い野田を筆頭に銚子や土浦は醤油造りが盛んになり、醤油輸送に高瀬舟などが使用された。醤油産業と舟運は密接な関係にあることから、醤油をとおして江戸時代以降の舟運について解説した。関連行事として歴史講座、野外講座、解説会（２回）などを開催した。

⑰名　　称：海上交流の軌跡―薩摩海道・歴史発見―
主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
開催時期：平成２４年１０月１３日（土）～平成２５年1月２１日（月）
場　　所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
内　　容：九州西南端という海上交通の要衝に位置し、古くから国内外の船舶が行き交う日本の南玄関口として、わが国の歴史に重要な役割を果たした薩摩をめぐる海上交流の歴史のうち、南薩摩地域の事象を中心とした薩摩をめぐる海上交流の軌跡について、元禄薩摩国絵図の原寸大複製、『秋目郷士年寄方日記帳』、薩摩塔、貿易陶磁など関連する文献史料・考古史料等ほか解説パネルとともに広く一般市民向けに紹介した。

⑱名　　称：南極海を進んだ日本の探検船
―開南丸の航海と海洋生物調査の視点から―
主 催 者：にかほ市教育委員会　白瀬南極探検隊記念館
開催時期：平成２４年１０月１６日（火）～平成２５年2月２４日（日）
場　　所：白瀬南極探検隊記念館
内　　容：本企画展は、白瀬矗を南極探検隊長とする日本南極探検隊が、1912（明治45）年、南極から日本に帰航して100周年を迎える企画展として開催したもので、南極海という未知の海域とその世界に生きる動物たちを初めて日本に紹介した白瀬隊の調査結果に最新研究を織り交ぜながらスポットをあて、4次元デジタル地球儀ダジックアースなど最新の科学展示手法を取り入れながら、小中学校の児童生徒に分かりやすくその魅力を伝えた。

⑲名　　称：発見！私たちのすむ名護の川と自然
～あなたは何本の川を知っていますか？～
主 催 者：名護博物館
開催時期：平成２４年１１月２日（金）～平成２４年１２月２日（日）
場　　所：名護博物館
内　　容：沖縄島（以下、本島）には大小合わせて 260 以上の河川があるが、このうち７割を超える 190 余りの河川が「やんばる」と呼ばれる北部地域に集中している。北部の中心都市である名護市は、様々な自然環境の河川を見ることができ、特に大浦川や汀間川では、本島でも随一の生物多様性の高さを誇るほか、市街地を通る都市河川もあり、川と人のくらしの携帯も多種多様である。そこで、本企画展では、名護市を流れる河川を紹介するとともに、そこで暮らす生きものや自然、人との関わりについて興味・関心を持ってもらう機会を提供することを目的に写真、標本、水槽展示を行った。また、関連行事として探検講座、講演会、ミニ企画「川の自然を学ぼう！」なども開催した。

⑳名　　称:指宿まるごと博物館Ⅳ　指宿みなと物語　－薩摩を支えた山川港－
主 催 者：指宿市（指宿市考古博物館　時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ）
開催時期：平成２４年１２月２２日（土）～平成２５年2月２４日（日）

場　　所：指宿市考古博物館　時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ
内　　容：中世のころから国際貿易港として栄えた山川港は、江戸時代に薩摩藩の港となり、鎖国体制のもと琉球貿易の窓口として重要な役割を果たした。歴史的にも津口板書、五人番所といった海上警固の役所が設けられてきた中、現在は指宿海上保安署が設置され、重要な港の一つとして位置づけられている。本企画展では、山川港にまつわる中世から近世までの歴史をパネルなどを用いて紹介した。

㉑名　　称：チーバくんと学ぶ　深い海に暮らす生きものたち
主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館
開催時期：平成２５年２月１６日（土）～平成２５年３月１５日（金）
※３月１６日から５月６日までは自主開催
場　　所：千葉県立中央博物館分館海の博物館
内　　容：深い海の中は、人が直接近づくことが難しいため、わずか水深数百メートルの場所に棲む生きもののことさえよく分かっていない。そのような生きものたちの暮らしや体のつくり、人との関わりについて、①深い海ってどんな海？、②深い海の生きもの大集合、③深い海と千葉県勝浦の漁港、④深い海の魚を観察する、⑤深い海の魚を採集するなどの内容で紹介した。関連行事として「深い海に暮らす生きものたち（講座）」を２回開催。

㉒名　　称：２０１２年度特別展「発見！モササウルス」
主 催 者：和歌山県立自然博物館
開催時期：平成２５年２月９日（土）～平成２５年３月１５日（金）
※３月１６日から３月３１日までは自主開催
場　　所：和歌山県立自然博物館
内　　容：約 7500 万年前の和歌山の海についての知識を深めてもらい、ひいては現在の海にも興味をもってもらうため、国内一の保存状態を誇る大型海生爬虫類のモササウルスの化石をメインに、調査で得られたさまざまな海の生物の化石を加えて展示を行った。関連行事として、特別内覧会も開催した。

㉓名　　称：第２０回企画展海軍記録画－絵画によりたどる海軍の歴史（前期）－
主 催 者：呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）
開催時期：平成２４年３月１４日（水）～平成２４年５月２１日（月）
場　　所：呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）
内　　容：海軍の戦争記録画は、海戦の状況を中心に、日清・日露戦争を描いた作品から始まり、日中戦争期には陸戦隊や航空機による戦闘の様子が加えられ、太平洋戦争期には、描かれる範囲も広くなり、特攻や玉砕の場面も描かれていった。本企画展では、幕末、海軍の創設から太平洋戦争終戦に至るまでの海軍の歴史を絵画作品に焦点をあてて紹介した。

【支援辞退】

㉔名　　称：県内巡回展「平清盛の時代と瀬戸内海」
主 催 者：広島県立歴史博物館
開催時期：平成２４年３月２３日（金）～平成２４年５月１３日（日）
※平成２４年５月１８日（金）～１２月２４日（日）は県内１０ヶ所での自主開催
場　　所：広島県立歴史博物館他１０ヶ所
※対象企画展が県内１０市町での巡回展示となり、１０館にわたる相互事務手続き及び各館開催時の支援要件の遵守が困難なため、支援辞退となった。

２．巡回展の開催（１０館）

日本全国の博物館や水族館等を対象に公募し、応募のあった１０館に「海と船の巡回展」アイテムを貸し出し、展示を実施した。

また、経年劣化した巡回展アイテム１号機・2 号機・3 号機の定期メンテナンスのためオーバーホールを実施した。

① 主 催 者：新上五島町鯨賓館ミュージアム
開催時期：平成２４年４月２４日（火）～平成２４年５月１３日（日）
場　　所：新上五島町鯨賓館ミュージアム

② 主 催 者：みちのく北方漁船博物館
開催時期：平成２４年４月２８日（月）～平成２４年６月１７日（日）
場　　所：みちのく北方漁船博物館

③ 主 催 者：一般財団法人 境港市文化振興財団　境港市海とくらしの史料館
開催時期：平成２４年７月１日（日）～平成２４年７月３０日（月）
場　　所：境港市海とくらしの史料館

④ 主 催 者：西南学院大学博物館
開催時期：平成２４年９月３日（月）～平成２４年９月２９日（土）
場　　所：西南学院大学博物館

⑤ 主 催 者：大阪市立海洋博物館なにわの時空館
（指定管理者：大阪ガスビジネスクリエイト(株)）
開催時期：平成２５年１月２日（水）～平成２５年２月１７日（日）
場　　所：大阪市立海洋博物館　なにわの時空館

⑥ 主 催 者：北海道立オホーツク流氷科学センター
開催時期：平成２４年１０月６日（土）～平成２４年１２月９日（日）
場　　所：北海道立オホーツク流氷科学センター

⑦ 主 催 者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ　青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸
開催時期：平成２４年５月１２日（土）～平成２４年７月８日（日）

場　　所：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

⑧ 主 催 者：熊本県富岡ビジターセンター　　指定管理者 熊本県苓北町
開催時期：平成２４年９月６日（木）～平成２４年１０月２３日（火）
場　　所：熊本県富岡ビジターセンター

⑨ 主 催 者：社団法人　桂浜水族館
開催時期：平成２４年７ 月２１日（土）～平成２４年８月３１日（金）
場　　所：桂浜水族館

⑩ 主 催 者：八戸市水産科学館マリエント
開催時期：平成２４年９月１ ６日（日）～平成２４年11月１５日（木）
場　　所：八戸市水産科学館マリエント

３．「海と船の博物館ネットワーク」ＷＥＢサイトの保守、運用
インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」ＷＥＢサイト上にて全国の海事関係博物館施設の情報を広く公開し、「海と船の企画展」情報及び「海と船の巡回展」情報の公開を実施した。

４．企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）
過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等が参加して、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」については、船の科学館　本館展示の休止中であり、万全の体制での開催が困難であるため、開催を中止した。

５．事業検討会の開催（開催の中止）
船の科学館の本館展示が休止中であり、当館将来計画策定中の現状において、本ネットワーク事業の評価のみならず、将来的な目標を考える事業検討会の開催は困難であると判断し、開催を中止した。

事業目標の達成状況

１．「海と船の企画展」への支援
実施２３企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海洋及び海事知識の啓発を広く図ることができた。
「海と船の企画展」入場者数各館合計４４８，７９９人

① 主 催 者：八戸市水産科学館マリエント
入場者数：５８，８３６人
成　　果：入場者数については、実施期間が申請時の予定開催期間より約 1ヶ月短縮となったにも関わらず、目標入場者をほぼ達成すること

ができ、前年度の入場者と比較すると 112%増という好結果となった。この入場者数は、当館 25 年の歴史の中で、当館オープン年度（平成元年度）に次ぐ 2 番目の入場者数であり、これもひとえに、当支援による企画展の充実化及び広報活動の強化によるものと考えている。

② 主 催 者：兵庫県立考古博物館
入場者数：１５，４３８人
成　　果：本展では、平清盛や平氏、また日宋貿易に関連する考古資料や陶磁器を展示し、清盛による大輪田泊の整備によって日宋貿易がさらなる発展を遂げたことなどを紹介した。
本展をとおして、清盛と兵庫県との関わりを、より深く理解していただくことができる機会となった。また、関連事業として 6 回の講演会を開催し、多くの聴講者を集めたほか、「遺跡ウォーク」や「考古博であそぼう」、「クイズラリー」等のイベントもおおむね好評であった。観覧者数の目標は、12,880 人に設定しており、15,438 人が観覧し、目標値を 2,558 人上回ったことは、大河ドラマの視聴率が低迷するなかで善戦したといえ、全体として本展は成功したと考える。

③ 主 催 者：徳島県立博物館
入場者数：１２，６４２人
成　　果：展示そのもの、また関連行事全体を通して、県民の漂着物に関する関心は高く、予想外の来場者を得ることができた。具体的には、展示では、12,642 名もの来場者があったが、これは前年比のみならず、他の展示と比較しても非常に多いと言える数値である。また、関連行事も応募が定員の倍に達した。これらのことから、当初目的とした「楽しみながら海の環境や海流への理解を深めるとともに、海洋に関しての関心を高める」という点は、十分に達成できたものと考えられる。

④ 主 催 者：西南学院大学博物館
入場者数：４，４８８人
成　　果：大学博物館というと敷居が高いとか、入りづらいなどの印象をもたれることが多く、本事業は大学博物館共同企画シリーズと銘打っておこなった特別展であることからさらに気難しい印象を与えるのではと心配していた。しかし、入館者数だけをみると前年比の 117%となっていることから、着実に博物館活動が受け入れられてきたものと考えている。これはひとえに大学博物館がこれまで行ってきた年 2 回の特別展及び 3 回の企画展、博物館ニュースや年報などを発刊し、取り組みを広報していること。また、本事業支援を受けて各関係者へ広範囲に告知することができ、展示の質も高めることができたことも、多くの来館者に恵まれた要因と考えている。
西南学院の児童だけでなく、近隣小学校の児童も博物館に訪れるようになっていて、博物館に幅広い層の来館者があることは、開館以

来目標とするところであり、本事業を行えたことが目標に近づく大きな成果となった。さらに今回は、ネットワークの支援を受けて海事系博物館である神戸大学海事博物館と共同開催することができ、展覧会を両大学行うことができ、これまでの大学博物館連携事業より飛躍して展開できたことは、ネットワークの支援によるところが大きかったと感じている。

⑤ 主 催 者：神奈川県立歴史博物館
入場者数：１８，１０８人
成　　果：本展覧会では、目標入場者数 15,000 人の 120.7%にあたる入場者を得ることができた。会期の大半が夏休み期間に当たることから、児童・生徒を対象とし、これまで当館を利用してこなかった人たちの来館を誘引できた。また、展示を通して、ペリーのイメージ形成について考察することを目標とした子ども向け事業を展開し、参加者ほぼ全員から満足したとの回答を得られた。本展は、担当者の研究成果を反映したものであり、広く一般向けに新たな研究成果を普及することができた。なお、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞から取材申込があるなど展示内容はメディアの注目するものとなった。

⑥ 主 催 者：萩博物館
入場者数：６６，５９７人
成　　果：萩博物館は総合博物館として平成 16 年度に開館し、18 年度までは専ら年配層を対象に歴史・文化に関する特別展・企画展を開催してきた。しかし、平成 19、21、23、24 年の「海と船の企画展」支援事業による企画展はいずれも大盛況となった。この成功を期に市内外の人々の間で「夏休みは萩博物館へ！」という雰囲気が定着してきたため、5 回目の挑戦として「海」や「川」に関わる生物を含めたテーマを設定して開催したのが今回の特別展である。
結果として、この展示は申請時の来場者数予想 35,000 人の 190%にもなる 66,597 人もの入場があり、目標を想定以上に上回って達成できた。なお、この来場者数は、当館が所在する萩市の人口（約 5 万 3 千人）の 125%にも達しただけでなく、来場者アンケートによると市内のすべての小学生（2,216 人）が 1 人あたり 2 回以上来場したに匹敵する結果ともなった。また当館の開館以来、過去最高の来場者数となった「2010 年ＵＭＡとの遭遇」（22 年度：67,769 人）をわずかに下回りつつもそれに匹敵する、歴代第 2 位の大盛況となった。成功の要因としては、①さまざまな世代の興味を惹くテーマ設定、②さまざまな広報宣伝を戦略的かつ徹底的に実施したこと、③臨場感あふれる展示会場づくりが挙げられる。

⑦ 主 催 者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館
入場者数：９０，５７０人
成　　果：入館者数が目標（100,000 人）に達しなかったことは残念であるが、今回の企画展では、一般の大人や子どものほか、専門家や収集家な

ど、より幅広い層に楽しんでいただき、好評の内に閉幕することができた。規模的に大きな展示であったため、一度では見ることができず何度も足を運んでいただいたお客様もあった。展示品の中では、今回新規に製作した万華鏡とスタンプラリーがとても好評であった。別途販売した展示解説書や企画展記念グッズも人気で、解説書は期間中に完売した。イベントのほうも大方好評で、無事に終了することができた。

⑧ 主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
入場者数：１，２７４人
成　　果：来館者数に関しては、前年度に対しても目標に対しても共に上回ることとなった。船のエンジンに興味を持っている学生などの来館者が増えたようであり、以前より懸案であった学生来館者の増加に対して、多少ではあるが成果が見られたものと考える。今回のテーマは、船舶・船用機械に関係する内容であったためか、関連会社に就職した卒業生の方々にも興味を持ってもらうことができ、足を運んで頂けることができた。展示内容に関しても、博物館ボランティアスタッフの展示資料収集に懸ける情熱も強く、最近の動力事情に関しても充実した展示ができるとともに、将来期待されているエコシップに関しても関係企業からの資料の提供などがあり、本海事博物館所蔵資料だけでは不十分であった、最新技術・資料まで展示することができた。

⑨ 主 催 者：五島観光歴史資料館
入場者数：１，７４５人
成　　果：目標入館者数 2500 人に対して目標達成度 69.8%という結果になった。展示テーマが難解すぎたためか、中高年層の反応は良く時間をかけて展示を観覧する方も多かったが、小中学生は、企画展示室を足早に通り過ぎる場面も多かった。実際に来館した方からの感想や反応は概ね好評で、企画・展示の内容や方向性は一定の評価ができるものとなっており、離島に居ながらにして他地域の文化財に触れる機会はこれからも提供していきたいが、家族連れや小中学生が主なターゲットとなる夏、旅行客が主になる秋など、開催時期による企画展の特性を踏まえた上でのテーマ・資料の選定や展示方法を課題としたい。

⑩ 主 催 者：笠岡市立カブトガニ博物館
入場者数：１７，７１２人
成　　果：今年度は、7 月 20 日から 9 月 30 日までと、前年と同じ期間で、カブトガニの不思議な生態をテーマとした特別展示「謎の生き物？カブトガニの不思議展」開催し、17,712 人の皆様にご観覧いただいた。前年と比較すると、943 人増加となり、目標を上回る結果となった。平成 21 年度の博物館リニューアルオープンをピークに、毎年減少傾向となっていた、期間中の入館者数が昨年度よりも増加したことは、昨年度以上の成果が得られたものと思われる。

また、太古の昔からその姿を変えておらず、未だに謎の多いカブトガニについて、飼育や研究を行っている者でしか一般的には知り得ない不思議な生物を、小学生を中心とした子供たちに伝えることができたとともに、カブトガニの貴重さを伝え、海の環境保護意識の向上を図るという、当館独自の目標も概ね達成できたものと考える。

⑪ 主 催 者：尚古集成館
入場者数：５８，２２６人
成　　果：本企画展の期間中入館者は目標の８割にとどまった。その一方で、解説図録を通じて、港湾都市鹿児島の歴史や文化についての教育普は当初予想以上に上回ったと考えている。
鹿児島県社会課教育部会で当館が教員の研修先として用いられた際、海との結びつきが 薩摩藩の近代化に大きな影響を与えたことを説明し、学校現場でこれらの知識が活かされたと考えている。
副館長の松尾は鹿児島市職員からの依頼で、本企画展の解説図録を基に講演し、自治体が都市鹿児島発展の歴史についてより興味・関心を持つきっかけになった。この他、鹿児島大学での講議や鹿児島純心女子短期大学におけるシンポジウム、鹿児島玉龍中学校の授業など学校教育の場や、鹿児島市上町地区の上町タウンマネジメントなど市民団体への教育の場でも解説図録は活用され、企画展の「呼び水」になったと同時に、鹿児島県内の学校教育、生涯教育に有効活用された。
2011 年の九州新幹線全線開業の反動や東日本の観光復興により、鹿児島県外からの観光客が減少したため、来館者数も前年と比べ低下した。一方で、解説図録は教育、行政、市民団体等の各種方面で積極的に活用され、大きく宣伝されるとともに企画展終了後もしばしばお客様から解説図録を求められ+るなど、長期に有効利用できるものになっている。

⑫ 主 催 者：口之津歴史民俗資料館・海の資料館
入場者数：２，７２７人
成　　果：当該企画展は、開港 450 年を迎える口之津港で、「世界帆船模型展覧会」を開催し、港に関わった企業の歴史・文化に触れることで市民が広く海や船を理解し、興味を持つことを目的に開催した。入場者数が、目標入場者数の 272.2%になったことから、より広く地域の方々に地域の港「口之津港」を知ってもらい、海や船に興味を持ってもらえたと考えている。本企画展開催前には、地元新聞社、ケーブルテレビ局、市ホームページでの積極的広報や関連イベントの開催により目標をはるかに超えることができたと考えている。

⑬ 主 催 者：埼玉県立川の博物館
入場者数：２４，０７３人
成　　果：大手農機具メーカーの協力によって、最新型の乗用田植機を展示するなど、農機具ユーザー対象の展示会以外で目にする機会が少ない現代の稲作技術を一般に広く紹介することができた。また、

期間中来館する多くの社会科見学小学校団体に対して、現代の稲作や田んぼの生きものを紹介し、ヒトと生きものの関係や給食など毎日の食について学習する機会を提供した。さらに農業高校との連携によって、将来の稲作を担う後継者や学校の取り組みを紹介することができ、博学連携の一例となった。入場者は伸び悩んだが、埼玉県・荒川地域の「水のめぐみ」である田んぼをクローズアップし、大事なコメ生産の場として、また豊かな自然環境の二面を掘り下げ、さまざまな工夫が施されている現代のコメづくりや、生きものと共生する環境を学べる展示が展開できた。

⑭ 主 催 者：鈴鹿市（大黒屋光太夫記念館）
入場者数：１，４４４人
成　　果：ラクスマン来航について一般の人にわかりやすく展示し、理解をひろめることが今回の展示目標であった。事業の成果として、展示終了後もマスコミや一般の方から問い合わせを多く頂くようになり、少なからず「ラクスマン来航」について興味や関心を寄せてくださる人が増えたことを感じている。展示終了後の図録の請求も増えている。入館者数については、1 日平均の入館者数 35 人を目指していたが、26 人/日にとどまった。第 1 期については 28 人/日であった。大黒屋光太夫記念館の 23 年度の平均入館者数が 22 人 /日であり、鈴鹿市内各史料館。記念館の平均が 15 人 /日であるため、特別展期間中の入館者数の増加はみられる。

⑮ 主 催 者：黎明館企画特別展実行委員会（鹿児島県歴史資料センター黎明館）
入場者数：８，８０７人
成　　果：観覧者総数 10,000 人を目標に開催したところ、目標達成度は 88.08%。目標には到達しなかったが、8,807 人の多くの観覧者が得られたことは成功であった。特に、若い世代・学生が多く、それに九州新幹線全線開業の影響もあってか県外の方々の観覧もみられたことは特筆すべきことであった。アンケートや直接の評価などから企画特別展の内容は高い評価がなされたと思われる。黎明館企画特別展の絶対的評価に、講演会・シンポジウム、解説講座を開催することによってより深く理解する目的があるが、その目的は充分達成されたことをアンケートなどで確認できた。

⑯ 主 催 者：千葉県立関宿城博物館
入場者数：１９，２５３人
成　　果：開催期間における入館者数の目標を 30,000 人に設定し、広報エリアを半径 25 ㎞圏内に広げ、そこに所在する社会教育施設などへポスター・チラシを配布した。また開催の前日に報道機関向けの内覧会を実施し、報道機関 1 社・ケーブルテレビ 2 社が取材に来た。しかし、最も期待した関宿城まつり（10 月 28 日）が雨天に見まわれ、人出が少なかったので、入館者は 19,253 人と目標に届かなかった。展示の内容については、醤油を題材にしたテーマだったので、来館者が興味・関心を持ち、満足度が 91%と好評だった。

⑰ 主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
入場者数：２，９１２人
成　　果：当企画展では、九州の西南端という海上交通の要衝に位置し、古くから国内外の船舶が行き交う日本の南玄関口として、わが国の歴史に重要な役割を果たした薩摩をめぐる海上交流の歴史に関し、薩摩半島の諸港や海路等が描かれた元禄薩摩国絵図の原寸大複製、幕末の外国船の来航等や海防対策等が記録された「秋目郷士年寄方日帳」、薩摩塔や貿易陶磁など、南薩摩地域の事象を中心に薩摩をめぐる海上交流の軌跡を、解説パネルなどと共に、関連の文献資料や考古資料等を展示して広く一般市民に向け紹介を行った。企画展図録については、入手の問い合わせなども多く好評で、入館者数は、前年度同一期間入場者比 80%であったが、期間内入館者数は申請目標入館者数に比して 112%の目標達成率となった。

⑱ 主 催 者：にかほ市教育委員会　白瀬南極探検隊記念館
入場者数：３，１３４人
成　　果：白瀬南極探検隊について、様々な角度から当時の探検について紹介した。まだ全国的にも珍しいダジックアースの展示では、もともとあるコンテンツのほかに、白瀬南極探検隊と同時に南極点を目指した世界の探検隊との「南極点到達レース」を新コンテンツとして追加したことにより当館との関連性を深めることができ、小中学生の児童生徒にも分かりやすく紹介することができた。また、今回、新たに発見された白瀬南極探検隊の南極探検船「開南丸」、その前身である「第二報效丸」の設計図面をどこよりも早く展示できたことはすばらしい成果であった。そのほか、南極海に生息する海洋生物の剥製の展示、ペンギン動画の展示など、小さな子供でも興味を持ちやすい内容で、入館者の世代も幅広くカバーすることができた。
しかし、目標達成状況では入館者数の比較によると前年同期比 80%弱で、目標人数には届かなかった。
今後は、入館者の世代別の嗜好性などを考慮し、ある程度ターゲットを絞ったかたちでの展示内容を検討するほか、時期的な要因や他イベントのタイアップの可能性などを視野に入れながら新しい企画展示を練っていきたい。

⑲ 主 催 者：名護博物館
入場者数：２，７２５人
成　　果：本企画展は、開催期間が当館としては長めだったこともあり、ここ数年では最も多い入場者数を記録することができた。企画展のテーマや展示内容に因るところが大きいのは勿論のことだが、支援を活用した広報活動が功を奏したものと思われる。すなわち、企画展の主な来客層と思われた小学生、中学生の市内全生徒に学校を通してチラシを配布した結果が反映されたものと推察される。アンケート結果で回答者に児童が多く、企画展を知った手段で最も多かったのが「学校」であることもこれを支持する結果となっている。

来場者の展示に対する満足度は目標値を達成し、一定の評価を得ることができた。川の環境を可能な限り再現した水槽や川辺でみられる鳥類剥製の設置など、臨場感のある展示が功を奏したようである。支援を活用して作製した全長 1.3mのオオウナギ全身骨格はインパクトがあり、アンケートでも印象に残った展示に挙げる回答者が多かった。

⑳ 主 催 者：指宿市（指宿市考古博物館　事遊館ＣＯＣＣＯはしむれ）
入場者数：１，９３０人
成　　果：入場者数に関しては、対目標入場者数割合が 107.2%、対前年度同一期間入場者数割合が 101.5%と、微増ではあるが目標を達成することができた。微増に留まったことについては、市内外へのマスコミを通じた広報・情報発信等をさらに積極的に進める必要がある。講座については、市民（一般）を対象に実施し、定員を上回る受講があったため、今後は、子ども向けの体験学習やイベントの開催も検討し、さらなる集客に努めていきたい。

㉑主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館
入場者数：４，２８４人
成　　果：平成 23 年度企画展開催期間中の入場者数 3,475 人（実開催日数 23 日、151 人／日）に対し、平成 24 年度企画展開催期間中の入場者数は 4,284 人（実開催日数 24 日、179 人／日）となった。
入場者のアンケート結果からは、ダイオウイカやタカアシガニなどの大型の標本の人気が高いが、小学生以下限定の「わたしのお気に入りの生きもの」のお絵かきでは非常に多様な展示物に人気が分散していた。またこの事業を横断幕やポスター・リーフレットで知ったという回答が多く、助成を受けての広報が効果的であったと考えられる。入館者数は前年度比で 14%増加しており、「深い海」という一般から子どもまで人気の高いテーマであることが関連していると思われ、関連講座では、この企画展示に出し切れなかった標本を収蔵庫で見学するなどして、参加者に好評であった。

㉒主 催 者：和歌山県立自然博物館
入場者数：１２，５１９人
成　　果：企画展開催期間の入場者数は、前年度同一期間入場者数を大幅に上回っており、一定の成果があったと考える。本企画展は、マスコミにも大きく取り上げられ、期間入場者数も昨年を大幅に上回った。アンケート等を見る限り企画展そのものに対する反応は良好であり、概ね成功と考える。強いて言えば、開催期間を夏休み期間に設定した方が多くの人に企画展を見てもらえたかもしれない。

㉓主 催 者：呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）
入場者数：１９，３５５人
成　　果：開館以来初の絵画作品展による利用者層の拡大を目指した企画展であり、開催期間中の目標入場者数 18,000 名に対する入場者数は

19,355 名で、対目標入場者数割合は 107.5%となった。また企画展アンケートによると満足、やや満足を合せ 75%であったことから、満足度は６割以上と評価できるが、入場者数の目標は達成したものの、期待した女性層、家族連れの来場が伸び悩んだこと、博物館で絵画作品展を行なう困難さなど、来館者の期待には充分対応できなかった。

【支援辞退】

㉔主 催 者：広島県立歴史博物館

※対象企画展が県内１０市町での巡回展示となり、１０館にわたる相互事務手続き及び各館開催時の支援要件の遵守が困難なため、支援を辞退

２．巡回展の開催

巡回展展示アイテムの３セット（１号機：１０点、２号機：７点、３号機：６点）を、全国１０か所の博物館、水族館等において開催し、子供たちを中心とした海洋及び海事知識の普及啓発を図ることができた。

「海と船の巡回展」入場者数各館合計７５，３６８人

①主 催 者：新上五島町鯨賓館ミュージアム（1 号機利用）

入場者数：６０４人

成　　果：「海の生き物展～海と船の巡回展～」と題した企画展を、当ミュージアム 2 階で実施した。

巡回展は、実際に子ども達が触って体感できる展示物が多く、遊びながら海の“不思議”について学ぶことができるとして訪れた方々に大変好評で、子ども達には特に「イルカトーク」が人気であった。

また地元のダイビングハウスや漁協等にも協力をいただき、本町の海中で撮影した魚の写真展や漁獲高のパネル等も展示し、普段なかなか見ることのできない海洋生物の姿や県内水産業の現状などについて、知っていただけた。

企画展開催中は、子ども（高校生以下）の入館料を無料にしたので、家族連れで訪れた方々も多く、昨年の同一期間中に比べ、入館者が 320 人程増加した。

②主 催 者：みちのく北方漁船博物館（1 号機利用）

入場者数：１，９６０人

成　　果：「海と船の巡回展　海のぎょ！シアター」として常設展示室内において開催した。

幼稚園児や小学生の校外学習の一環としての見学も多く、ビジュアルな展示によって、より理解、学習が進んだようである。

今回の企画展によって、自然環境とくに海洋生物の問題に関して、より身近に考えることを促す機会とすることができた。

③主 催 者：境港市海とくらしの史料館（1 号機利用）
入場者数：１，３８５人
成　　果：史料館で遊ぼう「海と船の巡回展」として開催した。展示アイテムは「海のクラフト工房」「イルカトーク」「ウミガメオス・メス　スマートボール」「進化する船たち」の 4 点を史料館第 1 展示室に展示し来館者に楽しんでいただいた。目標入場者数 2,000 人としたが期間中の入場者は 1,385 人で、昨年同月と比較して入館者減となった。その要因としては団体客の減少があげられるが、「イルカトーク」及び「 スマートボール」は大人気であった。

④主 催 者：西南学院大学博物館（1 号機利用）
入場者数：６８０人
成　　果：借用した展示アイテムを使って企画展「ギョギョギョ西南☆海ステリー」を開催した。本展覧会は博物館実習成果展と位置付けており、本学博物館実習生 9 名を企画立案から展示レイアウト、ポスター作成などを含めて作業にあたらせた。
本学博物館ではこれまでに年に2回の特別展と3回の企画展を開催し、あわせてこれとは別に学生主体による取組として夏休み期間中に展覧会を行ってきた。ちょうど博物館実習を行っていることもあり、その成果展を開催してきたが、今回は教材アイテムがあったことからいつもとは違った角度からの展覧会となった。
将来、博物館を担うであろう人材を貴館から借りたアイテムで教育できたことは、博物館実習を効果的に行うことができたとともに博物館活動も有効に行うことができた。いつもとは異なる取組みは来館者に新鮮さを与えることができたので、新たな来館層の発掘および博物館理解への一助ともなった。こどもワークショップでも新たな参加者を得られたことから、本学博物館の活動にも幅が広がる結果となった。

⑤主 催 者：大阪市立海洋博物館　なにわの海の時空館（1 号機利用）
入場者数：１４，１５１人
成　　果：今年度「海と船の巡回展」は年始 1 月 2 日、会期終了が 2 月 17 日と例年より半月遅い開催となった。例年 2 月は閑散期であるが、「巡回展」の効果と「時空館」の閉館報道による駆け込み需要で入館者数が前年 11,402 人に対し前年比 124%（2,749 人増）の 14,151 人となった。展示の手法は例年通り全長 60mの海底トンネルを利用して、「海 の生きものせ～くらべ」を展示し、展示棟 1 階の見学ルート導線上にその他の体験アイテムを展示した。来館者のほぼ全員が何らかのアイテムを体験され、とりわけ「イルカトーク」が人気であった。開館から 12 年「時空館」は 3 月 10 日に閉館が決定し、「巡回展」が最後の展示イベントとなった。

⑥主 催 者：北海道立オホーツク流氷科学センター（1 号機利用）
入場者数：５，８０３人
成　　果：当施設は、流氷及び海洋に関する科学的知識の普及を図ることを目

的の１つとしており、この巡回展は当施設常設展示の内容にも即していることから、巡回展示物を常設展示スペースに設置することにより、入館者にはより充実した内容で体験見学をしてもらうこととし、解説などは興味を持って見学している方などに柔軟に対応した。
また、10 のフルアイテムは展示室内にボリューム感を持たせ、内容も大人から子供までわかりやすく楽しめるもので、クラフトコーナーではイカ型紙ヒコーキが「よく飛んでびっくりした、また来たい」などの声もあり、お客様の反応も良かった。
当施設では、この時期は閑散期であるが、前年度を上回る入館者数を得られたことは、大きな成果といえる。

⑦主 催 者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ　青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸（2 号機利用）
入場者数：１４，８１５人
成　　果：貸出展示アイテムとして、「泳ぎの回転寿司」、「親子を探せ！」の 2 点を借用し、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸 2 階ロビーにて開催した。展示アイテムを通して子供から大人まで海の生きものたちの成長の進化や泳ぎ方を知ってもらうことができた。
目標入場者数には満たなかったのが残念であるが、多くの来館者に展示アイテムに触れて楽しんで頂けたと思われる。

⑧主 催 者：熊本県富岡ビジターセンター　指定管理者　熊本県苓北町（2 号機利用）
入場者数：３，７８３人
成　　果：今回借用した 5 アイテムを、富岡ビジターセンター館内のレクチャールームに設置し、「海と船の巡回展」と銘打ち展示を行った。
本展示の目的である「自然環境保護の重要性と海洋環境に支えられる我々の経済活動」に対する利用者の意識高揚を図ることができた。

⑨主 催 者：社団法人　桂浜水族館（3 号機利用）
入場者数：２０，８６８人
成　　果：企画展「海のトリビア」として本館 2 階展示室で開催した。巡回展のアイテムを利用する事によって、海や魚について遊びながら立体的に学ぶことができ、理解を深めさすことができた。水族館への興味、認識を深めることができたが、龍馬ブーム（22 年ＮＨＫ龍馬伝、23 年りょうま博）のかげりによる反動で観光客が減少したため、入館者数は昨年同期にくらべ 91％と大幅に減少した。
巡回展「海のトリビア」の単独の集客効果はそれなりにあったと考えられ、同展への参加者、希望者は従来イベントより多く、入館者の 50％とみると 1 万人となり、本展の開催がなければ入館者は更に減少したと思われる。

⑪ 主 催 者：八戸市水産科学館マリエント（3 号機利用）
入場者数：１１，３１９人
成　　果：開催期間中、合計 6 アイテムの展示を行い、必要に応じてスタッ

フが説明及び実演を行った。海のクラフト工房については、展示場所での工作の他に「作り方シート」を自由に持ち帰りできる方法とし、より広い普及に努めた。
観覧者が昨年度動機の約3割増となっており、今回の巡回展開催、及び企画展（「海と船の企画展」支援事業『水の生き物おもしろ企画展 全10企画』）の効果だと思われる。

３．博物館ネットワークの保守、運用

ネットワークホームページを活用し全国の海事関係博物館等の情報を公開・運用するとともに、海と船の企画展情報、海と船の巡回展情報、各館イベント開催情報等を広く一般に公開するとともに、ネットワーク成果物情報や研修会成果等を公開・整理し、博物館関係者向け情報の拡充を図った。

①アクセス者数：２４，７８２人
※集計期間：２０１２年４月１日～２０１３年７月３１日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：３．１２ページ

４．企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）

過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等が参加して、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」は、船の科学館　本館展示の休止に伴い、万全の体制での開催が困難あり、開催を中止した。

５．事業検討会の開催（開催の中止）

船の科学館の本館展示が休止中であり、当館将来計画策定中の現状において、本ネットワーク事業の評価のみならず、将来的な目標を考える事業検討会の開催は困難であると判断し、開催を中止した。

以上